

## 昭和十三年邦文天文書一覽

名譽會員 水野千里

例によつて、昭和十三年中に手にした天文書の短評を試みやう。

番號	書名	著譯者	巻數	頁數	定價	發行年月日	發行所
1	新天文講話	村上 忠敬	1	145	Y 1.50	昭和13 II 19	恒星社
2	趣味迷信と事物の由來常識	渡部 善彦	1	455	"	" " 20 (再版)	桑文社
3	迷信の解剖	日野 九思	1	524	3.80	" III 17	厚生閣
4	子供の天文學	原田 三夫	1	373	2.00	" V 10	誠光堂
5	星座名對照表	大阪支部 天文庫部	1	16	0.20	" VI 15	大阪支部
6	太陽系の起原	ラツセル	1	218	2.20	" VII 18	恒星社
7	昭和十四年理科年表	東京天文臺	1	412	1.50	" XI 30	丸善
8	宇宙	松隈 健彦	1	160	0.80	" XII 10	岩波書店
9	日本曆の神祕を語る	近藤 芳一	1	174	0.85	" " 11	日本古蹟研究所
10	詩經的 昴	野尻 抱影	1	11	?	?	研北科學圖書館

1. 新天文講話 本書は昭和十二年の夏、村上忠敬氏が、名古屋中央放送局から、夏期天文講座として一般の人々へ天文の話をもされたものを基礎として書かれたので、第一講太陽、第二講遊星、第三講恒星、第四講銀河系、第五講宇宙附録11項、挿畫及び寫眞38圖から成つて居る小冊子であるが、さすが専門家の手で著はされたので、要領を得て居て、初學者に最も適當な天文書である。

2. 趣味常識 迷信と事物の由來 項目は309あつて、これを五十音順にならべ簡易な説明が加へてある。天文に關するものは、兎門、三隣亡、節分、太陽曆、七夕祭、地球儀、時計、年號、丙午、彼岸、厄年等十數項あるのみである。

3. 迷信の解剖 本書は總論、支那古代の天文曆法、天地五行説、十干十二支、五行配當、周易判斷、九星説、曆元問題、兎門、丙午、厄歳と男女相性、曆の中段、曆の下段、歳德全神八將軍、辰の迷信化、迷信の種々相（認識の缺陷に基づく迷信、其の一）、迷信の種々相（同上、其の二）、迷信の種々相（感情の低劣に基づく迷信）、迷信の種々相（意志の障害に基づく迷信）の19章と支離

153項から成る菊判524頁の書物である。著者日野氏は153部の迷信に關する書物を讀破し、科學の知識を以つて編纂されたものであつて社會、日本文化に貢獻すること大なるものがあらう。

4. **子供の天文学** 天動説と地動説から説き起し、太陽系14章、恒星界10章、地球の誕生、宇宙の始まり、曆、望遠鏡と天文臺の29章、附録プラネタリウム、別刷寫眞15葉、口繪四季の星座が載せてある。子供にも分る様に平易に説いてあるが、初學の大人が讀んでも利益することが多い。

5. **星座名對照表** 東亞天文協會大阪支部發行銀河叢書の第一輯である。内容は恒星の個有名詞、日本名、ラテン名、ドイツ名、イギリス名、フランス名、エスペラント名の對照表で便利なものである。星座の起源と沿革から説き起し本文に入り最後にギリシヤ文字の大小と發音が記されてある。此の一事を見ても、大阪支部の活動が窺はれる。

6. **太陽系の起源** プリンストン大學天文大學教授 H. N. ラツセルの著述を我が鈴木敬信、高橋篤子の兩氏が共譯されたもの、第一章運動方面から見た太陽系の性質、第二章太陽系の物理學的及び化學的性質、第三章太陽系の起原説、註、記事索引、人名索引、挿畫14圖、太陽系の起原といへばカントやラプラスの説を以て金科玉條として居て、其の後に多くの學説が Outcome は葬られ、又出て來つて居るが、未だに何人も首肯する様な名説がない。

7. **理科年表** 本書は天文年鑑と共に年々發行され、天文に關するよい年鑑である。

8. **宇宙** 僅か160頁の小冊子であるが、内容充實し、一戸博士の高等天文学、日下部博士の天文学汎論と同様、大學の講義が基であつて、邦文天文書中の最も高等なものである。内容は第一章 恒星に附屬する物理量、第二章 恒星の運動、第三章 恒星の分布、第四章 大銀河系 A. 局部恒星系、B. 球狀星團、C. 銀河系の回轉、第五章 星雲、第六章 相對論的宇宙論 A. 靜的宇宙、B. 非靜的宇宙——膨脹宇宙であつて、一通り天文の素養ある人士の熟讀翫味すべき良書である。

9. **日本曆の神祕を語る** 徳島縣撫養町日本古曆研究所から發行されて居る、日

[216頁へ續く]

☒四月例会(8日) 夕刻より心齋橋筋をぐらやにて開會、山崎・山形兩氏の「東日プラネタリウム見學對話」、神戸の神田氏「倉敷天文臺を訪ねて」、織田氏「保土谷隕石の報告」、西森氏「太陽プロミネンスに就いて」、森先生「西商天文部の近況」、高城氏が新プラネタリウム解説者3名の紹介等あり、盛況裡に開會、出席者19名。

☒銀河第3巻第3號 五月1日附發行、200部突破記念號として60頁。

表紙「火星・地球軌道圖」、口繪「故田中博士遺影」(アト寫眞版)、「火星見取圖」3枚(密着燒寫眞)、卷頭言「眼視變光星觀測論の刊行に際して」、「火星運河論」伊達、「ヨーロッパ天文臺行脚」(2) 田中博士遺稿、「觀測の生理學」江原醫學士、「四季の太陽」(1) 高木公三郎理學士、「保土谷隕石と横山隕石」、「曆」S. D. 生、「天聲入語」、「觀天雜誌」津留繁夫、「遺稿の後に」田中正治醫學博士、「湖畔の故田中博士」石原こう子、「憶田中博士」西森、「火星の大接近と協同觀測」、「五・六月の天象」、「編輯後記」、附録“Star-Legends, among the American Indians” (3)。

〔213頁より續く〕

本古曆の教訓、曆の天文記事の見方と共に近藤芳一氏の力著である。緒論、第一篇干支の實體を語る、第二篇日時及び方位の吉凶の真相を語る、第三篇定所の吉凶の真相を語る、第四篇二十八宿及び七曜の實體を語る、第五篇六曜の實體を語る、第六篇九星の實體を語る、第七篇九曜星の實體を語る、第八篇現代民間曆の誤謬を摘示す、附表一干支表、納音表の内容を有し、曆の研究家は無論のこと、一般人士も心得て置くべきことが多い。

10. 詩經的星 本書は「科學ペン」五月號の野尻抱影氏の文を張我軍が漢譯されたものである。それに「文化」第五卷第五號所載、青木正兒氏の從西湖三塔說到雷峯塔(張我軍譯)とを合し、北京近代科學圖書館刊第五號の單行本とされたものである。詩經所載の星名とは參、昴、畢、定、織女、牽牛、箕、火、斗、伯和啓明(曉星)、長庚(宵星)等12星である。伯和啓明、長庚の何れも金星の事である。

附記 讀者諸君にお願い致すことがある。それは邦文天文書で新聞に廣告が出たものは購入して居るが、その他のもので前記以外のものを御承知の方は本誌に御投稿下さらば幸甚の到りである。遑つても然りである。